

令和6年度 徳島県立農林水産総合技術支援センター 農業大学校学校評価 総括表その1

「評価」及び「総合評価」の評定基準
 A：十分達成できた B：概ね達成できた C：達成できなかった

<p>本年度の重点目標① 多様な進路に応じた人材育成</p> <p>一人ひとりの社会的・職業的自立に向け、学生個々の進路やニーズに対応した教育を行い、生涯にわたる社会人・職業人としてのキャリア形成を支援する。</p>	<p>総合評価</p> <p>A ● B C</p>	<p>(所見)</p> <p>希望進路の実現に向け、「農大進路指導計画」に基づき、進路希望調査、資格取得希望調査及び三者面談を実施し、進路希望を把握するとともに、県の農業法人協会と連携した就農相談会や進路研修「ようこそ先輩！」等を実施し、進路意識の向上を図った。また、進路未決定の学生に対しては個別面談を実施したり、徳島公共職業安定所(駅のハローワーク)等と連携し就職相談を実施した。卒業時点での進路決定率は100%であった。卒業生21名の進路先については、就職就農7名、農業団体・農業関連企業等への就職9名、その他企業への就職2名、海外研修1名、進学(4年制大学編入)2名となった。</p> <p>4年制大学への編入については、2年次生2名が受験し、2名が合格した。また、1年次生には希望者が1名いるため、引き続き複数の教員で役割分担を行い、希望大学の学力試験、論文、面接等の個別対策を行う必要がある。</p> <p>行事等の集団活動に関しては、伝統行事である農大祭、四国農学連スポーツ大会等を実施することができた。例年どおり、スポーツ大会をはじめとする各行事を企画し、運営に務めた。また、模擬会社「そらそうじゃ」の校外活動については、県内では「消費者まつり」、「SunSunナイトマーケット」、「百姓一でのアイス販売」、「ヴォルティス学園祭」、「徳島食の博覧会」、県外では神戸市で「阪急オアシス店舗前販売」に出店し、企画・販売体験を積んだ。集団活動や校外体験活動は学生の実践的コミュニケーション力を育むとともに、主体的に課題を発見し改善していく問題解決能力の育成に貢献するものであるため、次年度も学生が成長を実感できるような取り組みにしていく必要がある。</p> <p>以上の観点から、「多様な進路に応じた人材育成」に係る総合評価をB(概ね達成できた)とした。</p>
--	----------------------------	--

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	評価	次年度への課題
① キャリア プラン ニング(将 来設計) 能力 の育成	1 進路希望調査、面談、進路相談会等のキャリア教育を通じて、働くことの意義や職業観を身に付け、1年次より進路について主体的に考え、明確な目標を持てるように支援する。	<ul style="list-style-type: none"> 三者または二者面談の実施(年3回以上) 各種キャリア教育の実施による進路目標の決定(1年次中に90%以上) 	<p>進路指導を踏まえた面談を年間3回(4月・5月・12月)実施した。また適宜個別面談を実施した。学校評価アンケートの「三者面談や個別面談が、コース選択や進路決定に役立った」という項目に、1年次生の肯定的評価は95.2%であった。</p> <p>キャリアプランニングに向けて、就職候補先である農業法人等との交流(農業法人説明会、農業法人バスツアー、進路研修「ようこそ先輩！」)及びハローワーク研修を実施した。</p> <p>1年次生の進路目標決定率(12月20日時点)は、95.2%であった。具体的な就職希望先または進学希望先の決定率は76.1%であった。</p>	A	A	進路指導担当者と連携し、個人面談や農業法人との交流・研修会等を充実させ、2年次当初から就職活動に取り組めるように、進路指導に努める。
	2 徳島県農業法人協会、公共職業安定所等と連携したキャリア教育を推進する。	<ul style="list-style-type: none"> 農業法人と連携した就農相談会等の交流学习の実施(各学年1回以上) 公共職業安定所等と連携した就職ガイダンスの実施(各学年1回) 	<p>農業生産法人との交流会等のキャリア教育が進路選択や進路実現にとって有意義であることを事前に十分指導するとともに、農業法人協会との連携により、各学年1回(1年次後期及び2年次前期)の交流会を開催した。</p> <p>2年次生対象の交流会に参加した、18法人のうち4法人に4名の就職が内定した。</p> <p>各学年1回(1年次後期、2年次前期)、公共職業安定所と連携した就職ガイダンスを実施した。事後指導として適宜個別面談を実施し、キャリア教育が進路選択や進路実現に直結するよう支援した。</p>	A	A	引き続き、農業法人等との連携を強化するとともに、公共職業安定所のもつ機能を最大限活用し、学生の就職活動を支援する。
学校関係者委員の意見		<ul style="list-style-type: none"> 農業法人バスツアーについては、実際に見て、五感で感じる貴重な体験となる。これからも実施してほしい。 進路研修「ようこそ先輩！」などを通じて卒業生が一堂に会し、農大生と情報交換する機会なども検討してはどうか。 				

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	評価	次年度への課題
② 個々の ニーズに 基づいたマン ツーマン 指導の 充実	1 学生に基礎的・基本的知識を確実に習得させ、学力向上を図る。	・職員の授業改善に係る肯定的評価(90%以上) ・講義で行われる教養科目・専門科目、それぞれの不認定者数(10%未満)	職員の授業改善に対する学生の肯定的評価の10項目平均値は98.4%であった。不認定者が10%を超えたのは、1年次生2科目、2年次生0科目。	B	A	学生の学習に対する興味喚起及び学習意欲の向上。
	2 編入学希望者には、「進学対応カリキュラム」により、学力向上を支援する。特に編入学試験等で必要となる英語・化学・生物・小論文・口頭試問においては、補習や個別指導を行う。	・編入学を希望する学生の合格決定率(60%以上)	進学希望の学生には、個別に専門科目の補習や論文作成、口頭試問対策、面接指導を行った。 4年制大学編入学試験受験者は2名おり、1名が愛媛大学、1名が徳島大学への編入学試験に合格した。 さらに、英語力の強化のため、編入学試験合格者及び海外研修予定者に対し、新たに「英語試験対策講座Ⅱ」の科目を設け、指導した。	A		編入学試験の早期化に対応して、個別指導開始時期を早めるとともに、自主的に学習を行う意欲を向上させる。
	3 農業法人との交流会、履歴書作成指導等の実施により、1年次の早期から就職活動に向けた意欲の醸成を図る。	・農業法人との交流会からインターンシップにつながった学生の割合(20%以上) ・履歴書等の作成指導(1年次1月より開始し、適宜)	農業法人との交流会「農業法人説明会」を10月に開催した。次のステップである企業説明会やインターンシップには15名の学生が参加した。参加率は68.1%であった。 1年次の2月に「ハローワーク研修」を実施し、就職活動の始め方やその留意点(求人票の見方、履歴書の書き方等)について指導を行った。	A		仕事への適性を把握するためにインターンシップは有効であるため、より多くの学生が参加するよう指導を行う。 履歴書作成については、特に重要な志望理由や自己PRについて作成指導をするとともに、企業研究を十分行うよう指導する。
	4 学生のニーズに対応した資格取得講座を開催し、資格取得を支援する。 本年度は、危険物取扱者試験、毒物劇物取扱者試験、大型特殊免許、大型特殊けん引免許、農業技術検定、フォークリフト、わな猟免許、土壤医検定、英語試験、パソコン検定に係る講座を開催する。	・各講座への受講率(1、2年次を通して学生の80%以上)	英語試験対策講座、危険物取扱者試験、毒物劇物取扱者試験、大型特殊免許、大型特殊けん引免許、農業技術検定、フォークリフト、狩猟免許、土壤医検定、パソコン検定に係る特別講義を開催した。 学生の92.9%※が講座を受講した。 ※受講したと認定された者の数。 1年次生の講座受講率は、95.2%。 2年次生の講座受講率は、90.5%(1年次から通算)。 ※不認定となった者を除く。	A		学生の資格取得希望を調査し資格取得講座の設定に活かす。
	5 「就職・大学編入学試験受験報告書」や「就職試験面接指導マニュアル」など、各種資料を活用し、各々の進路に合わせた個別のきめ細やかな面接指導を行うとともに、進路未決定者に対しては、適宜進路面談を実施する。	・進路指導に対する学生の肯定的評価(80%以上) ・年度末の進路決定率(90%以上)	進路実現の重要性や働くことの意義等について、個別面談において、1年次から意識付けを行った。 就職試験受験報告書などを活用し、各学生の就職試験前には適宜きめ細やかな個別指導を行った。 2年次の進路指導に対する肯定的評価が85.7%であった。 卒業時点での進路決定率は、100%であった。 進路指導評価、進路決定率ともに数値目標を達成した。	A		引き続き、面接等による個別のきめ細やかな進路指導を実施するとともに、進路未決定者に対しては、適宜進路面談を実施し、速やかな進路決定に向けたサポートを行う。
学校関係者委員の意見	<ul style="list-style-type: none"> ・自動操縦など開発されているが、使いこなせる人材が少ない。人材育成に努めてほしい。 ・資格試験の希望者に対し、合格者数をもっと増やしてほしい。三者面談などを通して家庭へ周知し、学生だけでなく家族の意識が高まるようにしてほしい。 ・「わかる授業」が実践され、英語力を強化するための授業の新設など改善が見られる。資格取得や検定にも積極的に取り組んだ成果が表れた。 					

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	評価	次年度への課題
③ 高度情報化への対応と コミュニケーション能力 並びに問題解決能力 の育成	1 現在のパソコンにおいて事実上の「標準」となっている「Microsoft Office」の各ソフトウェアを活用できる能力を育成する。 授業内容及び機械作業等の動画教材を活用し、予習、復習が行える学習環境を提供する。	・ワード、エクセル、パワーポイントを活用できる学生の割合(80%以上) ・情報教室にて動画教材の閲覧機会の提供(常時)	「ワード、エクセル、パワーポイントを活用し、学習内容や体験活動についてまとめることができた。」という項目に肯定的な回答をした学生が、1年次生では95.2%、2年次生では100%であった。 動画教材は、ドローン操作に関するコンテンツやスマート農業機械の実演会など新たに5本作成し、インターネット環境で閲覧可能となっている。	A	A	引き続き「ワード、エクセル、パワーポイント」を習得・活用できるよう指導に努める。 授業内容及び機械作業等の動画教材を作成し、タブレット等を用いて、いつでも予習、復習が行える学習環境を整備する。
	2 プロジェクト学習における計画段階から調査・研究に至る一連の取組や、それらの成果や課題をまとめ、発表する機会を設定することにより、正確かつ的確な情報伝達能力、並びにプレゼンテーション能力を育成する。	・プロジェクト学習の進捗・成果に関する発表の開催(年間3回以上)	プロジェクトの計画発表、中間発表、成果発表の練習も兼ねて、コース内で進捗状況を発表する機会を3回以上設け、プレゼンテーション能力の向上に努めた。 成果発表会における職員による評価が10点満点中7点以上の学生は21人中21人で、100%であった。学校代表の学生2名が中国四国ブロック大会で発表を行ったところ、その成果を認められ、全国農業大学校等プロジェクト発表会に出場した。審査の結果、1名は特別賞(農業大学校同窓会全国連盟会長賞)、1名は優良賞(全国農業大学校協議会会長賞)を受賞した。	A		プロジェクト学習の計画段階からの指導・助言を充実させる。
	3 ワークショップやグループ活動等、知識を相互作用的に活用する機会を授業や実習に取り入れ、言語活動を活性化させることにより、思考力・判断力・表現力等を育成する。	・コース実習においてワークショップやグループ学習等の時間の確保(年間20時間以上)	特に各種発表会の準備の際に発表の仕方や資料の提示方法などの検討を行い、言語活動の充実を図った。また、実習前の予習や復習の充実を図った。 実習前の座学や情報収集活動などを、農業生産技術コース、6次産業ビジネスコースとも30時間程度確保した。	A		引き続き授業や実習において言語活動を適宜活用し、思考力、判断力、表現力の育成に努める。
学校関係者委員の意見		・ICTを活用した授業内容により、デジタル機器や情報を適正に活用する能力が育成され、表現力やコミュニケーション力の向上につながっている。				

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	評価	次年度への課題
④ 体験的な学習活動による実践力の育成と社会性の醸成	1 模擬会社「徳島農大そらそужья」の活動において、定例会(業務担当者会)を定期的開催する。 農業法人等による研修会を開催する。	・定例会の開催(令和6年5月から12月まで毎月1回) ・商品開発や販売技術向上に対する学生の肯定的評価(80%以上)	定例会は、夏休みの8月を除き、5月から12月までの間に月1回のペースで計7回開催した。また、イベント前などの打ち合わせや確認のため、役員会を19回開催した。 商品開発や販売技術向上に対する学生の肯定的評価は88.1%であった。	A		引き続き、定期的に定例会及び役員会を開催する。
	2 模擬会社「徳島農大そらそужья」として各種販売イベントに参加し、仲間とともに活動する体験を通して、責任感や協力を重んじる姿勢を、農業大学の文化として定着させる。	・責任感や協力に関する学生の肯定的評価(90%以上)	消費者まつり、SunSunナイトマーケット、ヴォルティス学園祭、阪急オアシス店舗前販売など、県内外のイベントに計6回出店、校内ロビーでは、通常の開市に加え2回の大売出しを実施した。こうした経験を積む中で、自分の役割を果たすことや仲間との協力関係の構築を推進した。 責任感や協力に関する学生の肯定的評価は92.9%であった。	A		引き続きイベントへの出店、校内販売の充実を図る。
	3 模擬会社「徳島農大そらそужья」の活動を知ってもらうため、販売日や販売品などの情報提供やイベント出店報告などを、ホームページやInstagramで積極的に発信する。	・ホームページ又はInstagramからの情報発信(毎月1回以上)	大売出しのお知らせやイベント出店報告などを、Instagramから13回発信した。また、農大ホームページ内のそらそужьяのページを更新し、開市時間の変更や歳末大売出しをお知らせした。 さらに、県物産協会の協力で、阿波おどり会館の売り場のデジタルサイネージを活用し、そらそужьяの活動を動画で紹介した。	B		イベント予定、活動報告、目玉商品の販売など、さらに積極的に情報を発信する。
	4 「農業・6次産業体験学習」の実施に際し、事前に学習のねらいや受講の心構え等を指導する機会を増やし、意欲と目的をもって学習に臨むよう指導助言を徹底する。 農業会議とも連携しながら研修先の支援のもと、職業体験を通じて実践力と社会性を育成する。	・実践力や社会性の向上に関する学生の肯定的評価(90%以上) ・受け入れ先の意見回答者からの肯定的評価(80%以上)	農業・食品関係の法人、農業士各位の御協力により体験学習が実施できた。知識や技術等実践力、あいさつや言葉遣い等社会性の向上について、90.5%の学生が「大変そう思う」、「どちらかといえばそう思う」と回答した。 あわせて、教職員全員(100%)が「担当学生の実践力や社会性が向上したと感じた」と回答した。 研修先からのアンケート回収方法を改善したところ81.0%から回収できた。 研修開始前、直前及び実施後に説明会を開催し、受講の心得や自己目標を明確にすること等意識の醸成につとめたところ、研修先からアンケート回答者17名中、14名(82.4%)から肯定的評価を得られた。	A	A	引き続き事前の目標明確化や意識の醸成、社会のルール等について指導を行う。
	5 「農業・6次産業体験学習発表会」を開催し、学生が感じた成果と課題を整理して発表することで、学習内容の強化と定着を図る。	・視覚資料等を活用した体験学習発表会の開催(年1回)	体験学習の目的、学習内容等について、分かりやすい資料づくり、プレゼンテーション資料作成を指導し、7月の発表会では、整理されたものを視覚的に伝えることができていた。最終評価では、学生全員が80点以上の得点を得ることが出来た。	A		発表内容の取りまとめについて個別に指導助言を行い、発表力(プレゼン力)を育成する。
	6 校外研修等を通じて、先進的な取り組みを調査研究することにより、幅広い視野と地域振興につなげる実践力を養成する。	・研修時間の設定(12時間[6時限]以上)	農業生産技術コースは、熱帯性植物の種苗会社を視察するとともに、量販店における販売状況等を調査し、14時間の研修時間となった。6次産業ビジネスコースは、中山間地域での加工品開発等の取り組みについて視察するとともに、量販店等の市場調査を行い、12時間の研修時間となった。	A		学生の意向を勘案し、継続実施に努める。
学校関係者委員の意見	<ul style="list-style-type: none"> ・そらそужьяの活動をもっと地域の人々に知ってもらえるよう、校外への販売を促進してはどうか。 ・機会があれば、地域の企業として販売を共働したい。 ・ホームページやSNSを積極的に活用して販売の内容をもっと知らせるようにしてはどうか。 ・農業の現状は、生産するだけでなく、流通・販売までに及ぶため、広告や企画力も必要となる。また、農業を経営するためには、「もうかる農業」も必然となることから、様々な体験から学ぶことが多いと思う。取組を継続してほしい。 					

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	評価	次年度への課題
⑤ 特別活動・課外活動の活性化による自主・自律性の醸成と仲間づくり	1 学生生活を活力あるものとするため、学生自治会活動、四国農学連行事などの自主的運営を支援する。	・学生自治会活動等の成果の展示(農大祭ほか適宜) ・他県の学生との交流(適宜)	学生自治会が主体となって農大祭を開催し、今年度は新たな取組として農大カフェ等を運営し、学生が生産・加工した農産物商品を販売した。 また、四国農学連行事では、農学連スポーツ大会の全種目に参加し、卓球については準優勝であった。さらに、意見発表会では、大会運営を通じて他校と交流を深めることができた。	A	A	次年度事務局担当校と意見交換を行い、次年度の四国農学連行事の運営が円滑に進むよう協力する。
	2 学校行事(剣山登山、農大祭、収穫祭、四国農学連スポーツ大会等)について、仲間が共同して企画、運営することを支援し、行事を成功させる。	・行事实施に関する学生の肯定的評価(80%以上)	学生自治会主催で、校内の行事としては農大祭、新入生歓迎ボウリング大会、収穫祭等を、四国農学連行事としては、総会、スポーツ大会、意見発表会を成功させた。 事後アンケートでは、「学校行事は充実したものになった」の肯定的評価が97.6%、「自治会活動や学校行事は、仲間作りや連帯感を高めるために役立った」の肯定的評価が95.2%であった。	A		学校行事は、学生生活を豊かにし仲間づくりの場ともなる重要な活動であるため、学生の主体性を尊重しつつ各行事の課題点を改善し、更に充実するように指導する。
学校関係者委員の意見						

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	評価	次年度への課題
⑥ 積極的な教育活動の改善並びに学校運営の改善	1 課長会、コース会等を定期的かつ効率的に実施し、学生指導をはじめ、危機管理、コンプライアンスなどに関する情報交換や研修を行うことで、教育課題の共通認識、指導情報の共有化、並びに教職員の資質向上を図る。 また、就農等に向け効果的かつ実践的なカリキュラムの編成を行う。	・課長会の開催(月1回以上) ・コース会の開催(月2回) ・学校運営や教育指導に関する研修会等の開催(月1回) ・次年度のカリキュラム編成に関する検討会の開催(年2回)	課長会・職員会を効率的に進めるため、あらかじめコース会や校務担当で運営上の課題や学生指導に関する事前協議を行った。課長会・職員会の開催回数は14回、コース会および各校務担当会議は適宜開催し、情報共有を図った。 課長会等においては、学習や生活の状況など学生の情報を共有するとともに、指導方針の協議・共有化を図った。また、職員による始業前の朝礼やパソコンの活用により、1日のスケジュールや学生への指示事項を共有した。 今年度は、「コース内における情報共有」に対する教員の肯定的評価は81.8%となっている。 カリキュラムの編成に向けてはより実践的な内容となるよう、職員へ事前アンケートを実施すると共に、個々に意見を聴取するなど、職員の意見を十分把握、協議を重ね、次年度のカリキュラム編成を行っている。	B	B	学生の状況や個々の教職員の教育活動を共有し、より透明性の高い学校運営に努める。 また、教職員の更なる積極的な情報交換・協議の機会を増やせるようスケジュール管理を行う。 今後とも、カリキュラムについては、定期的にチェックを行い、次年度に向けて見直しを検討していく必要がある。
	2 定期的に、学校教育目標に基づく具体的な取組のヒアリングを実施し、指導の進捗状況や適切さを評価する。	・各担当教員に対するヒアリングの実施(年2回) ・学校評価等の実施(年2回)	各担当教員に対し、指導の進捗状況等について、適宜ヒアリングを実施した。 教員対象とした学校評価アンケートでは、「課長会等での積極的な情報発信や教育活動及び学校運営上の諸問題の解決」に関する肯定的回答が92.3%と、改善に努力していることが示された。 また、センター外部評価委員会では、カリキュラム編成や運営において、スマート農業や気候変動対応など、社会的ニーズに即した講義・実習の取組に対して高い評価を得た。	B		引き続き、学校評価結果を活かした目標を設定し共有することにより、職員間の相互協力体制を強化すると共に、意欲を持って学校運営に参画できる雰囲気をつくる。
	3 先進的な農業技術や6次産業化など高度化する農業経営に対応した教育を提供するための学習資材の拡充及び既存設備の適切な更新により、学習環境の改善を図る。	・学習資材等の導入検討会の開催(年2回) ・既存設備の点検等の実施(年2回)	先進的な農業技術の講義や実習内容に沿った学習資材等の拡充に向け、職員への聞き取りを行うとともに、職員会や物品購入業者選定委員会において必要性や業者選定等を十分協議し、資材の導入・更新を行っている。 また、既存設備は各科目担当や備品担当が随時に行う点検に加え、一部の機材については定期的に専門業者へ点検を委託することにより、良好な状態を維持している。	A		今後とも、学習資材の適切な導入・管理により、良好な学習環境を維持する。
	4 高等学校との連絡・連携を密にし、学生の生活指導や教育活動の改善に活かす。	・高等学校への訪問(年1回以上) ・電話等による学生指導に関する情報交換(適宜)	今年度は全高校訪問の実施に加え、農業系高校への進路状況等に関して訪問や電話による情報収集を行った。	A		今後とも、高等学校との連絡・連携を更に密にし、学生指導に関する情報交換を行う。
学校関係者委員の意見		・会議等を適宜行い、情報共有するとともに、学生が先進的な技術を習得できるような設備更新や資材導入が行われている。高校訪問など学生確保に向け意欲的に取り組んでいる。				

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	評価	次年度への課題
⑦ 心の通う人間関係を構築する能力の素地養成	1 教職員の人権意識を啓発するために人権研修を行う。また、いじめなどの問題を早期発見するための研修を行い、対応能力を高める。	・学生の人権意識を高めるよう配慮した指導の実施における教職員の肯定的回答(90%以上)	教職員対象の人権研修を受講するなど、人権意識の高揚に努めた。 学校評価アンケート「授業、実習や行事を通じて学生の人権意識を高めるよう配慮した」に対する教職員の肯定的回答は84.6%であった。	B	B	引き続き、職員に対する研修を実施する。
	2 学校生活において問題を抱えていると思われる学生との面談を通して、心理的な問題等を早期に発見し、組織的に対応する。	・人権を尊重する仲間づくりに対する学生の肯定的回答(80%以上)	学校の教育活動全体を通じて、人権を尊重する意識の涵養に努めた。 学校評価アンケート「人権を大切にする仲間づくりができた」に対する学生の肯定的回答は97.6%であった。	A		日頃から学生の様子を観察し、必要に応じて個別面談等を実施するなどして、人権尊重の意識付けを行う。
	3 学生の悩みを解決するために、学生、家族等、教職員による三者面談を開催する。学校と家庭が連携し、協働する体制を構築し問題解決にあたる。 また、スクールカウンセラーを配置し、カウンセリングを受けられる体制を整備する。	・三者面談の実施(年1回) ・学校生活に関する調査の実施(年2回) ・いじめをはじめとする学生生活上の問題の早期発見、必要と思われる学生全員への教育相談の実施(適宜) ・スクールカウンセラーの配置(令和6年4月から令和7年2月まで) ・スクールカウンセリングに関する教職員研修の実施(年2回以上)	三者面談を1年次生及び2年次生に対し1回実施した。 また、学校生活に関する調査を2回実施し、要注意回答をした学生に対しては、個別面談を実施した。 スクールカウンセラーを令和6年4月から令和7年2月までの間に配置し、延べ10回のカウンセリングを実施した。また、悩みを抱える学生対応についての職員研修を1回と、学生・職員の参加する研修を1回実施した。	A		引き続き、三者面談、学校生活に関する調査を実施する。気がかりな点について職員間で情報を共有し、きめ細かな指導を行う。 スクールカウンセラーも引き続き配置し、学生が相談できる機会を確保する。
学校関係者委員の意見						

令和6年度 徳島県立農林水産総合技術支援センター 農業大学校学校評価 総括表その2

「評価」及び「総合評価」の評定基準
 A：十分達成できた B：概ね達成できた C：達成できなかった

<p>本年度の重点目標② 地域農業への寄与</p> <p>農業体験学習、模擬会社の運営、6次産業化への取り組みなどを通じて、社会との連携を深め、総合的な指導体制のもと、幅広い経営能力を養成するとともに、地域農業等に寄与する。</p>	<p>総合評価</p> <p>Ⓐ B・C</p>	<p>(所見)</p> <p>農業生産技術コースでは、「栽培から販売までの知識と技術を持った人材の育成」を課題として、年間を通して多種多様な農産物(水稻・野菜・果樹等)や畜産物を扱うことにより、学生の栽培・飼養管理における知識・技術の習得を支援し、学生プロジェクト8課題において、地域農業の諸課題に対応した技術の実践・検証に取り組んだ。</p> <p>6次産業ビジネスコースでは、プロジェクト学習の中で、加工品試作・試食アンケート・改良を繰り返し、商品開発を実践している。また、体験学習、県物産観光交流プラザ「あるでよ徳島」等への出店など学外での活動を通して、地域の実践者と直接ふれあうことで、コミュニケーション力の向上や、視野の広がり、学びへの刺激が得られ、これからの経営者として必須となる地域と連携することの重要性を学んだ。</p> <p>農業・6次産業体験学習、模擬会社「そらそうじゃ」の活動等を通して地域農業との連携を図った。また、日頃の農大ロビー販売、農大祭及び「SunSunナイトマーケット」等における販売活動を通して6次産業化に積極的に取り組んだ。</p> <p>情報発信及び広報活動に関しては、学校生活の様子や研究成果などは農大新聞「GoGo農大」やセンターニュース、石井CATV等で紹介し、地域農業や6次産業への貢献を図るとともに、農業大学校自体の広報を行った。</p> <p>以上のことから「地域農業への寄与」に関する総合評価はA(十分達成できた)とした。</p>
--	--------------------------	--

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	評価	次年度への課題
① 栽培から販売までの知識と技術を持った人材の育成(農業生産技術コース)	1 学生が主体的にプロジェクト課題解決学習に取り組むとともに、日々の栽培管理は学生同士が協力して実践する。また、活動の成果は農業者をはじめ広く情報発信する。	・プロジェクト課題で生産性向上、技術改善に取り組む学生の割合(50%以上) ・農大ホームページ、センターニュース等による情報発信(適宜)	全ての学生(100%)が主体的に生産技術の向上や地域の課題解決につながるプロジェクト課題に取り組んだ。 また、優秀なプロジェクト成果については、センターニュースへの寄稿、農大祭やオープンキャンパスでのパネル展示などを通じて、情報発信に努めた。	A	A	引き続き、学生自らが課題を設定し、自主的にプロジェクト課題解決学習に取り組める環境を整備する。
	2 「農大祭」や「ロビー市」等で販売する商品の栽培方法や機能性等について、コース実習や校外研修等を活用して、十分な知識を習得させる。	・農作物生産、販売において知識習得や技術向上に取り組む学生の肯定的評価(50%以上)	農大祭に向けては、7月に作付計画を作成し、生産体制として2年次生全員が生産品目担当として活動することにより、24品目の青果物等を販売した。また、サツマイモ掘り体験や野菜・果物の詰め放題などのイベントを通して、農大のPRや農業への理解浸透を図った。 校外研修では、バナナやコーヒーなど熱帯性植物の国内栽培を実現し、ブランド化を図っている事業者の経営概要を聴取し、これまでの農業と違った新たな知見を得た。 学生の自己評価では、「栽培及び販売活動等を通して、様々な作物に関する知識、技術が向上した」との回答が100%であった。	A		近年、猛暑などの異常気象により、作物の品質低下や栽培管理上の問題を引き起こしており、研究テーマにこれらの課題に対応した技術開発や新品種導入などを検討する。
	3 徳島県立農林水産総合技術支援センターや農業団体等の関係機関との連携を深め、先進的な栽培方法等について調査、研究する。	・試験研究成果、スマート農業技術及びみどりの食料システム戦略に即したプロジェクト課題に取り組む学生の割合(50%以上)	コース内の全プロジェクト課題のうち、スマート農業技術に関する課題はなかったもの、みどりの食料システム戦略に掲げる環境負荷低減技術や高い生産性を維持する生産体系に関する課題の割合は62.5%であった。	A		引き続き生産力や品質の向上、スマート農業を始めとする省力化の推進及びみどりの食料システム戦略に寄与する課題の取組を指導する。
学校関係者委員の意見		・今年度は米、野菜の高騰が大きな問題となった。発芽試験や育苗方法の改善など技術を磨いてほしい。 ・全ての学生が課題を見出し、解決に向けた取組を実践できている。また、校外への活動や環境負荷軽減への意識づけもできている。				

※「評価」及び「総合評価の評定」の基準 A:十分達成できた B:概ね達成できた C:達成できなかった

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	評価	次年度への課題
② 農作物の付加価値販売につながるビジネススキルを身に付けた人材の育成(6次産業ビジネスコース)	1 プロジェクト活動において、6次産業化を伴う農業ビジネスモデルを研究・実践する。	・6次産業化ビジネスモデルの研究に取り組む学生の割合(80%以上)	100%の学生が、商品開発に向けた加工、コストを勘案した価格設定に取り組み、その成果を卒業論文にまとめた。	A	A	地域課題を踏まえた6次産業化に取り組み、経営感覚を身に付け、プロジェクト活動を更に充実させる。
	2 学内外での実践活動における、市場調査等を通じて、消費者や市場ニーズを把握、分析し、商品開発や販売戦略等に活かす。	・商品開発のヒントや販売手法を学ぶ学習機会の提供(年3回以上)	神戸市の阪急オアシスや徳島ヴォルティス学園祭、県物産観光交流プラザ「あるでよ徳島」などの県内外の展示販売イベントに参加するとともに、農大祭や歳末大売り出し等で消費者ニーズを把握するなど6回の学習機会を設けた。消費者とのコミュニケーションから価格や量、パッケージ、PR方法など多くのことを学び、商品開発に役立てた。	A		市場ニーズを意識したプロジェクト活動を増やし、高付加価値化に向けた実践活動を実施する。
	3 プロジェクト活動に取り組む過程で、プロジェクトマネジメント、ブレインストーミング、PDCAサイクル等の課題解決の手法を習得させる。	・農作物の付加価値化に向けた様々なビジネス手法の活用とプロジェクトの課題解決に取り組む学生の割合(50%以上)	プロジェクト活動の計画や実施の過程で、様々なアイデアを検討し、適切な結論を導き出すことができたとする学生は、成果発表やアンケート結果から81.0%であった。	A		引き続き、最適な手法で課題解決ができるよう指導する。
学校関係者委員の意見		・従来の生産するための農業ではなく、マーケティングを行い、消費者ニーズを探るなど様々な取組ができています。付加価値をつけることは、これからの農業に欠かせない取組である。				

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	評価	次年度への課題
③ 地域農業への寄与のための体制づくりと、研究成果や学生活動に係る積極的な情報発信	1 六次産業化研究施設を活用し、加工品開発に取り組み、地域社会へ発信する。	・販売まで至った加工品の開発(10品以上)	アイス(桃、イチゴ、梨、カボチャ、不知火、シャインマスカット)、きんぴらソーセージ、はちみつチリドック、ハッシュドきんぴら、梨のクリームチーズ、人参ドレッシング、和紅茶ロールケーキ、桃のシフォンケーキ、阿波すず香マーマレード、ブドウシロップ、焼き芋ブリュレ、冷やし大学芋、スダチ調味料等10品目以上を開発し、販売した。	A	A	開発した商品は、引き続き、校内外のイベント等で販売し、ポップやレンピでPRするとともに、インスタグラム等で発信する。
	2 学生の研究や学校生活、「そらそうじゃ」の活動状況など定期的な広報等を作成する。また、農大HPその他の情報発信ツールを活用して農業関係機関、関連企業、高等学校だけでなく、広く一般に対して積極的に情報発信を行う。	・「GoGo農大」の発行(年間12回以上) ・HPの更新(適宜) ・県アカウント「農の宝島!!とくしま」による成果の情報発信(適宜)	教育活動に関する広報紙を年間12回作成して、公開した。農大HPの更新については、軽微な変更を含めると60回程度更新・修正を行い、最新の情報にその都度更新を行い、地域社会に発信を行った。県アカウント「農の宝島!!とくしま」を通じて、全国学生プロジェクト発表会における受賞や、オープンキャンパス、入学案内について、情報発信を行った。	A		引き続き、広報紙の発行、農大HPの更新並びにHP「農の宝島!!とくしま」への情報提供を行い、積極的な情報発信を行う。
	3 本校の教育活動に関して積極的な情報発信・広報活動を行い、未来の徳島県農業を担う意欲と活力に満ちた新入学生を確保する。	・高校への訪問、電話案内の実施(年間2回以上) ・高校でのガイダンスへの参加(年間20回以上) ・オープンキャンパスの実施(年2回)	高校訪問1回、高校への電話案内及び資料送付1回、学生募集説明会1回、オープンキャンパス2回、進路ガイダンス(高等学校での模擬授業を含む)を16回実施した。オープンキャンパスでは、学校施設の案内の他、農業生産技術コース、6次産業ビジネスコースに分かれ体験学習を実施した。県内の高等学校における進路ガイダンスでは、座学と実習が結びついたカリキュラムの特徴を紹介するとともに、模擬授業では環境と農業等をテーマに授業を実施した。紙媒体の学校案内のリニューアルを行うとともに、県広報番組「とくしまタイムズ」やラジオ番組への出演等を通して学校のPRに努めた。	B		引き続き、積極的に入学生の確保に努める。農業教育の専門校としての特色紹介に注力する。
学校関係者委員の意見		・農大の活動や魅力を広く情報発信できている。機会があれば、県内農業高校での収穫祭や校内販売を共働できれば、もっと広報できるかもしれない。				